

仏法即世法

「父上、執権北条泰時殿のご他界をいかがお考えになれますか」

「さればさあ、世に不思議なこともあればあるもの」

父といわれた、貫名次郎重忠はこう答えると、しばらく感慨無量の態であった。

時は仁治三年の十一月初旬。ところは房州小湊の浜辺。四か年の鎌倉遊学をおわった蓮長房は、清澄寺の師匠道善房の御許に帰ったが、一日の暇をいただいて今日は自分の生家をたずねると四か年の見聞を父に告げるのだった。

次郎重忠、今はこの浜辺の漁師に身をやつしてはおるがもとをただせば、由緒のある武士、とかく話が政道向きにわたるのもやむを得ない。仁治三年六月十五日、執権職北条泰時他界、蓮長房は当時鎌倉にあつて、世上の噂を親しく耳にしていた。未曾有の大逆事件承久の変は子供の時から日夜父から聞かされておったので、その一方の立役者北条泰時の死について、父に意見を求めてみたのである。

「しかもご他界に、六月十五日の日を選ぶとは、泰時殿も思い当たることがあろう。蓮長殿の生れた年の二十二年前の六月十五日こそは、泰時殿が東海道、東山道、北陸道の軍勢合せて十九万の総大将として、三上皇を御敵とみ泰つて、堂々京都に進軍したその日ではないか。不思議なことよ。こんな片田舎に住んでおつても四年前、後鳥羽法皇が隠岐の島に崩御せられてからその御怨霊の祟りがあると、鎌倉では専らの評判だと聞いておるが、どうぢや」

「さようでございます。崩御以前には後鳥羽法皇か隠岐の島よりお還りになったと屢々流言があり、また先日新院（順徳天皇）が崩御せられるまでは、これまた佐渡ヶ島を脱出せられたとの風評、屢々鎌倉にあつて、物情騒然たるものがありました。脱出還幸の望みも、もはや詮ない今日では、これまでに輪をかけて、御怨霊の流説しきりでございましょう」

「無理もないこと、後鳥羽法皇崩御せられた年の十二月には承久の乱に将たる三浦義村の急死、翌る年の正月には十万余騎の華々しい大将にてありし執権連署の北条時房の他界、後鳥羽法皇御怨霊の流説はまだまだ当分はやまぬであらう」

「蓮長もこのことにつき仏の教えを奉ずるものとして、日夜肝胆をくだいておりますが、これら諸將の死は還著於本人として当然なこととは考えますが、気の毒なのは一般の庶民でございます。承久三年、北条義時三上皇を御流罪という和国未曾有の重大事件より、今年仁治三年に至る二十二年間、鎌倉に大地震のあること都合五回、即ち嘉祿二年八月一日と九月一日、寛喜二年閏正

月、一昨年仁治元年二月、昨年四月三日には大逆浪さえ加わつて鶴岡八幡の拜殿はうちこわされた仕末でございます。しかして京、鎌倉に大暴風雨のあること総数九回、未曾有の飢饉疫病は数え上げるだけでも十指に余りますれば、殆ど隔年毎と申しても差支えがありません。世上においては、これはみな、御鳥羽院の御怨霊とのみ申しておりますが、禍はそのようなものでなく、もつともつと深かいところに根ざしておるものと考えます」

「そうなくてはならぬ、思えば一天万乗の大君とお生れになつた安徳天皇は、元暦二年春三月西海のもくずと成り果て申し、承久の年には三上皇の御遠島、

「啼けばきくきけば都の恋しさに此の里すぎよ山ほととぎす」

と御製あらせられた順徳帝は先日御崩御遊ばさられた。佐渡の真野には今なお時鳥は啼かぬというではないか、時鳥ですら皇恩の鴻大なるを知るというに、陪臣たる北条泰時一人の意志によつて、二十二年の長きにわたつて、北海の孤島に天子様を幽閉申し上げるとは何たる逆罪……」

「父上、しかもその泰時は今年正月四条天皇崩御の直後、佐渡の順徳帝の御心痛を、せめて京都の方々は慰めんものと、順徳帝の皇子忠成王を御位につけようとした摂政以下の申出を断然蹴つて、承久の変には御関係なかつたとの理由により、土御門帝の皇子邦仁王（後嵯峨天皇）に御踐祚を申し出でたとのこと。その使者秋田義景が使いの途中よりわざわざ帰つて、

「もしすでに京都のお計らいにて順徳院の宮つかせ給いたらばいかがあるべき」

と伺えば、

「このこと申し落したり、和殿をのぼるはかようのこのため、いみじくも問うたり、何条件細あるまじよし、さることあらば、おろしまいらすべし」

と下知したと申します。王法もすでに尽きぬというべきでありましょう」

「蓮長殿、そなたを出家させようと、十二の年の天福元年五月十二日、千光山清澄寺に登ったあの一里半の山道で、そなたは、

「父上、この善日磨はきつとえらい坊様になつてみせます」といつた時

「えらい坊様にならなくてもよい、ただ日本一の正しい人になりなさい、そして、父にはわからぬが、安徳帝の崩御、承久の変以来の此等世法の誤りは、如何なるところよりよつて来たかをただしなさい」

というたのを忘れてはおるまい……」

「はい、蓮長そのお言葉を今もつて身に体しております。世間の濁乱は人の心より来たり、人の心はその信ずる教えの是非によると近頃思っております。人とは天地靈妙の至極でございますれば、この至極皆狂えばこそ天変も地天もあるのが道理でございます。しかして仏の教はこれまた天地を貫く極理でございます。この極理をもつてこそ始めて、此等天変地天の由つて来たる由

縁、王法衰微の根源も尋ねることが出来ようかと存じます。しかるに仏の教えが八宗も九宗もあるは、天地至極の法理が狂っておる証拠でございます。鎌倉遊学四か年ほぼ念仏を極めたと思えます。この上は仏教の最高学府たる叡山に登ってこの仏法を顛倒せしめたものは誰か、仏の正意はいずこにあるかを極めて、この近年の災の根本を究めたいと思っております」

